

資料No.	書名	刊行年	内 容
1	しんのうほんぞうきょう 神農本草経	清 嘉慶4(1799)刊	清 孫星衍、孫馮翼輯。神農は中国古代の伝説上の皇帝で、農耕と医薬の祖。「本草」とは薬物全般にあたり、植物の他、鉱物・動物等を含む。「神農本草」は、漢から三国の頃に成立したとされるが、現存せず撰者も不明。500年頃、梁の陶弘景が当時の書物に残る引用文を元にまとめたとされる復元本は、365種の薬品を載せ中国本草書の祖型となったが、原本は早い時期に散逸した。本書は清代の復元
2	ほんぞう わ みょう 本草和名	寛政8(1796)刊行 (918年頃成立)	深根輔仁撰。中国の『新修本草』を基本に漢名と和名を考定し、和産の有無、産地などを記す。日本人による本草書。長く所在不明だったが、江戸時代に多紀元簡が幕府の紅葉山文庫で古写本を発見し、寛政8(1796)年に刊行した。
3	じゅうしゅうせいわけいししゅうるいびようほんぞう 重修政和經史証類備要本草	明 成化4(1468)刊 (元 1249年成立)	北宋1116年成立の『證類本草(政和本草)』を改訂したもの。『神農本草経』以降宋までの本草書の集大成。明末の『本草綱目』成立まで、中国や日本における本草学の中心的役割を果たした。
4	ほんぞうこうもく 本草綱目	和刻本 刊年不明 (明 1596年成立)	明 李時珍著。中国本草学史上最も充実した本草書。1892種の薬物について、名称や産地・形状、薬効等々の項目に分けて詳細に記述する。過去の膨大な典籍をあたり、30年近い歳月をかけて完成。日本への輸入は早く、慶長12(1607)年には林羅山によって徳川家康に献上され、以後幕末に至るまで基本文献として尊重され、中国からの輸入の他、和刻本も続出した。本書は寛文9(1669)年に刊行された「篆字本」と呼ばれる和刻本の重版と思われる。
5	やまとほんぞう 大和本草	宝永6(1709)	貝原益軒著。博物学的本草書。『本草綱目』の刊行以後、そこに記載された諸物に日本名をあてる研究が盛んに行われたが、益軒は本書で初めて『本草綱目』に記載されていない、日本独自の物が存在する事に言及し、本草学が文献学的学問から自然科学的学問へと発展する転機となった。
6*	えほんふくじゅそう 絵本福寿草	宝暦5(1755)	大岡春川画。草花を正月から12月まで並べて図にし、その和漢名、花色、詩歌を記した絵手本。第1ページに福寿草(元日草ともいう)をおき、書名にしたという。一部の図版は手彩色。大岡春川は狩野派の絵師。
7	かい 花彙	天保14(1843)	島田充房、小野蘭山著。山本亡羊校正。伝統的な「本草書」には必須の薬効などの記述を省き、純粹に植物について論じた書。著者2人はともに松岡玄達の門人。草部1・2冊を島田充房が著述した後、残りの草部3・4冊と、木部4冊を小野蘭山が引き継いで完成させた。図も著者らによるもので、特に蘭山による図は秀逸で、海外でも評価が高い。初版発行1759-1765。
8	ぶつるいひんしつ 物類品鑑	宝暦13(1763)	平賀国倫(源内)著、田村西湖・中川淳庵等校訂。田村藍水及び源内が会主となって開催した全5回の薬品会の出品物について解説した書。出品された約2千種の中から、「重複するものや結論が出ていないもの、ありふれていて世の人に知られているものを除いた360種」(凡例より)を厳選している。本草綱目の分類に従い14部門に分けて編集。和漢名と共にオランダ名、方言名なども記載されている。巻之六では、人參の培養法と甘蔗の製造法について取り上げている。
9	さいやくしき 採薬使記	[序]宝暦8(1758) 写本	阿部照任(将翁)・松井重康撰 後藤藤春補 高大醇編。阿部照任と松井重康が幕府の命で、採薬使として全国各地の薬物調査を行った際の、珍品やエピソードをまとめた書。その記述は陸奥国、武蔵国、紀伊国など全35ヶ国、総計107品に及ぶ。備中国の部では、紺と白の咲き分けや絞りの入ったアサガオについて記されている。
10	いずかいとうふどき 伊豆海島風土記	成立年不明 天保9 写	佐藤玄六郎・吉川義右衛門編。幕府の普請役である佐藤玄六郎と伊豆代官の手代吉川義右衛門が、伊豆七島を調査しまとめた地誌。巡見は幕府の命で天明元年から2年にかけて行ったとされる。伊豆七島それぞれについて、地理・歴史・寺社などを記し島の全体図を付す。また産物の項では、島でみられる動植物について彩色図と島での呼び名を添えて記されている。
11	ちようせいじんじんこうさくき 朝鮮人参耕作記	明和1(1764)? 明和3 写	田村元雄(藍水)編。朝鮮人参の種類や栽培法について記した『人参耕作記』(1748)の増補版。元文2(1737)年、藍水は將軍の命で朝鮮人参の種子を20粒下賜され、自園で栽培研究した(5年目に結実)。その時の経験に基づき栽培法を記述したもの。土のつくり方や種まき、害虫の種類についても記載。誰にでも分かりやすいようにするため図を添え仮名交じり文で著した、と自序で述べられている。
12	こうじんほん 広参品	宝暦11(1761)	松岡玄達監定 熊谷慎憲増輯。恕庵の原著「参品」を門人熊谷が増輯し、恕庵の子の子勲が校訂し出版したもの。輸入人参について近來の輸入状況、品種、真贋などを解説。さらに和品についても解説する。また、元文三年に幕府から希望者に向け販売された御種人参の種子と一緒に配布された「培養方」の内容が掲載されている。
13	わかにんじんこう 和漢人参考	安永3(1774)	加藤玄順(「治痢経験」著者)著。薩摩人参は真の人参ではないと論じた書。竹節人参、広東人参など様々な人参の図「人参諸品図」あり。
14	ほんぞうこうもくけいもう 本草綱目啓蒙 [再版?]	[文化8-文政12] (1811-1829)	小野蘭山述、小野職孝校、岡村春益録。48巻。江戸医学館における蘭山の『本草綱目』講義をまとめたもの。『本草綱目』を基礎に置きながらも、各品について蘭山自身の研究による独自の見解が述べられており、単なる解説書ではない。膨大な数の動植物や鉱物等の諸物について、産地や品質から各地の方言に至るまで、詳細に記した一大博物誌。初版成立は享和3-文化2(1803~1805)。
15	こうじんぞんぎ 広参存疑	(文化7(1810))? 写本	大槻磐水(玄沢)著。広東人参に関する考察をまとめた書。後書きの後ろに、キンバイザサの彩色図とそれに関する手紙の内容が付随している。彩色図は栗本丹洲(瑞見)によるもの。手紙は、丹洲が玄沢に宛てたものの追伸部分と思われる。「キンバイザサの発見者は(丹洲の父)田村藍水であり、和名の名付け親だ」と主張。また、広東人参に関しては「何も外二面白き奇拙拙考等無之」とあり、新たな説は今のところ無いとしている。国立国会図書館が所蔵する写本では、当資料にみられるような後書き以降の記述はみられないようである。

資料No.	書名	刊行年	内 容
16	ひやくひんこう 百品考	天保9(1838)一 嘉永6(1853)	山本亡羊(世孺)著。全3編から成る。本草綱目・救荒本草等に記載されている動植物について、形状・産地等を考証し採葉の実地で得た知識も加えた亡羊の集大成ともいえる『格致類編』(125巻)から、100種を抜粋し出版したもの。薬用、食用等には触れず動植物そのものについて記述されており、博物学的な書といえる。
17	ほんぞうずふ 本草図譜	大正5-11 (1916-1922)	岩崎常正(灌園)著。カラー木版刷り。初版発行は文政11~天保15(1828~1844)。当初は木版・手彩色で版行されたが経費が維持できず、後には手彩色写本という形で予約販売された。『本草綱目』の図化を目指した、日本最初の植物図鑑といべきもの。本書は大正期の複製版。
18	こほうやくひんこう 古方薬品考	天保13(1842)	内藤剛甫著。『傷寒論』『金匱要略』に記載される薬物220余種について薬性・効用等を論じた江戸後期の代表的薬物書。全5巻。巻1~4を植物に、巻5を動物・鉱物にあてる。当時の京都画壇名家および本草家100余名による写実的・科学的な挿図が各品に掲げられている。
19	どくひんびらん 毒品便覧 (第一集)	明治11(1878)	小野職愨撰、最上孝吉画。私家版。撰者は小野蘭山の玄孫。明治初期に田中芳男や伊藤圭介らとともに日本の博物学・植物学の発展を支えた。本書は蘭山『本草綱目啓蒙』などから拾集した毒薬40種について解説する。明治初期の実用的博物学の作品の一つ。
20*	そうもくかじつしやしんずふ 草木花実写真図譜	不明	川原慶賀著。天保7(1836)年に刊行された『慶賀写真草』(墨刷り)を改題して彩色版とし明治・大正期に再刊したもの。著者は長崎の画家で、シーボルトのために多くの植物画を描いた。西洋の知識で描かれた植物図譜集。
21	ろくもつしんし 六物新志	[序・跋]天明 6(1786)	大槻茂質(玄沢)訳考 杉田勤(紫石)校訂。蘭薬として代表的な六物(一角(ユニコル)・サフラン・ニクズク・ミイラ・エブリコ(アガリスク)・人魚)を、ヨンストン・ショメル・ドネウス等蘭書の説に基づいて考証したもの。挿図を蘭書から引用している。
22	Phytanthoza-Iconographia / Johann Wilhelm Weinmann	1737-1745	(花譜 / ヨハン・ウィルヘルム・ウェインマン) 薬種商のウェインマンが、多くの画家を雇って植物画を描かせそれをまとめて出版した図譜集。植物名は二名法以前のラテン語で記されており、アルファベット順に集録されている。図版は銅版手彩色。植物画家のエイレットによる画も含まれている。ラテン語版、ドイツ語版、オランダ語版がほぼ同時期に出版された。江戸時代の日本にオランダ語版が入り、当時の本草学者に影響を与えた。当館ではドイツ語版を所蔵。
23*	The botanical magazine, or, Flower-garden displayed →Curtis's botanical magazine, or, flower-garden displayed	1787-	(植物学雑誌) 薬剤師で園芸家のウィリアム・カーティスによって創刊された植物学雑誌。当時のイギリスの植物園で栽培されていた海外の目新しい植物を紹介する目的で始められた。植物画家が描き彩色されたカラー図版と、専門家による詳しい解説が掲載されている。一枚の図に一種類の植物を描くという、いわゆる「植物画(ボタニカルアート)」の形式を確立させた雑誌とも言われている。シリーズ4までの図版は、一部を除き全て手彩色。現在もイギリスのキュー植物園から「Curtis's Botanical Magazine」の誌名で刊行され続けている。
24	Atlas der officinellen Pflanzen... Bd.1-4	1893-1902	(薬用植物図譜:ドイツ帝国の薬局方に挙げられた植物に関する記述) / Berg, O.C. und C.F. Schmidt 薬用として用いられる植物の図譜集。図版を手掛けたSchmidtは、ドイツで多くの植物画を描いた19世紀の画家。「特に賞賛される図版は、筆致と着色が美しいだけでなく科学的精度も高い。一般的な植物学者に役立つと同時に、薬用植物を学ぶ学生にとっても価値ある著作となるであろう。」(Science N.S. Vol.10 P.28 1899より)
25	Medical botany... / James Morss Churchill & John Stephenson Vol.1-3 New ed.	1834-1836	(薬用植物誌 / チャーチル&スティーブンソン)ギルバート・トーマス・バーネット編 イギリス土着のものを含む、薬用植物について図示し解説した書。各植物ごとに、エングレーヴィングと手彩色で作成されたカラー図版、学名、薬効や利用法および植物学的解説からなるテキストで構成されている。カラー図版は植物画としても観賞価値が高い。本書は、1831年刊の初版に2図を追加し、新版として刊行された。
26	British phaenogamous botany, or, figures and ... / W. Baxter	1834-1843	(イギリスの顕花植物 / ウィリアム・バクスター) オックスフォード植物園の管理主任であったバクスターによる、イギリスの植物相に関する本。カラー図版はエングレーヴィングによる彫版と手彩色による。この図版は、オックスフォード在住の画家二人が描き、バクスターの娘たちによって彩色されたもの。
27	Handbook of the British flora / George Bentham Vol.1-2 2nd ed.	1865	(英国植物誌便覧 / ジョージ・ベンサム) 当時のイギリスでの著名なハンドブックで、著者の死後も繰り返し版を重ね、1世紀以上学生に使用され続けた。掲載された図は、19世紀の代表的な植物画家ウォルター・フィッチによるもの。図版が付随しているのはこの第2版のみである。
※当館所蔵の上記2冊は、合冊して製本されている。『英国植物誌便覧』をベースに、該当する植物の図版を『イギリスの顕花植物』からあてはめ挿入してある。			
28	日本薬園史の研究	1930	上田三平著。附図(3枚):享保十四年植村左平次採薬経路図,元御薬園御絵図,尾張藩御深井御薬園絵図 「尾張藩御深井御薬園絵図」模写図?:尾張藩の御深井御薬園は承応元(1652)年頃に開設され、幕府の薬園から下付された39種を含む約115種の植物を栽培した。江戸初期の薬園における薬種の姿がうかがえる貴重な絵図。(原図は徳川美術館所蔵)